方中履『切字釈疑』「字母増減」の条を読む
(「切字釈疑」第４節訳注)

富　平　美　波

１　はじめに

拙稿「方中履『切字釈疑』「等母配位」の条を読む（「切字釈疑」訳注１）」（『アジアの歴史と文化』第13輯）・「方中履『切字釈疑』「切韻当主音和」の条を読む（「切字釈疑」訳注２）」（『アジアの歴史と文化』第14輯）・「方中履『切字釈疑』「門法之非」の条を読む」（『山口大学文学会志』第61巻）に続き、本稿では、続く第4節「字母増減」の部分について、本文の校合と訳注の作成を行い、内容について若干の考察を加えたい。

２　本文

第1節～第3節に引き続き、校合に使用したテキストは下記の5種類である。

〈底本〉

1988年7月江蘇広陵古籍刻印社が線装本で影印刊行した康熙年間汗青閣刻本『古今釈疑』の巻十七（「汗」と略称。）

〈校合に用いたテキスト〉

① 『四庫全書存目叢書』第99冊（子部）『古今釈疑』（中国科学院図書館蔵清康熙汗青閣刻本影印）の巻十七（「存」と略称。）

② 『続修四庫全書』第1145冊（子部）『古今釈疑』（中国科学院図書館蔵清康熙十八年楊霖刻本影印）の巻十七（「続」と略称。）

③ 1990年7月上海古籍出版社が道光世楷堂刊本を底本として影印刊行した『昭代叢書』の「丙集」に収められている「切字釈疑」（「昭」と略称。）

④ 1971年5月台湾学生書局が国立中央図書館藏の旧鈔本を影印刊行した『古今釈疑（原題　授書随筆）』の巻十六（「授」と略称。）

次に、底本に従って本文を掲げ、テキスト間で本文の字句に異同がある箇所には、括弧付きの漢数字を付し、後に異同の内容を注記する。

本文を掲載するにあたって、割注と標点に関しては、下記の方法に従った。

・底本で割注であるものは、括弧でくくって記した。この方法は、Ⅱの注以下の部分の引用文においても踏襲した。

・底本には点が施されているので、下記本文もそれに従って「。」を表示した。判読に苦しむ箇所は、適宜判断した。

Ⅰ　第4節「字母増減」本文

字母増減

等韻之學。元魏時釋神珙始顯。而三十六字母。崇文總目曰。唐守温所撰也。呂介孺曰。大唐舍利創字母三十。後温首座益以孃床幫滂微奉六母。則是此法。可増可減矣。蓋等韻之來。初由譯成。所譯之字。必有方言。與今異讀耳。若今之泥孃疑喩影。豈有分乎。（介孺曰。泥舌頭。孃舌上。非也。孃入齊韻。自爲泥矣。讀穰則同日。讀嘗則同審。想唱在穰嘗之間。以知徹澄之音順呼。應似嘗字。知徹澄既與照穿床類。則安得孃不與禪審類乎。所以然者。劉長民胡雙湖。謂河圖變洛書。惟金火互位。而徵商適位金（一）火。故舌齒相通也。介孺曰。疑有訛呼爲夷者。蓋謂疑用力靳腭。使聲横放于兩牙間。而喩影但虚引喉。與腭無涉也。旁證之。乃凝（二）字也。儀禮疑立。即凝立。然疑凝又同泥矣。攷説文唐韻。凡安恩咢惡襖昂等字。俱用烏字五字作切響。而今人則半作腭聲。是則陸孫諸公。原不分矣。）故劉士明歌曰。知照非敷逓互通。泥孃穿徹用時同。澄床疑喩相連屬。六母交叅一處窮。呉幼清曰。三十六母。俗本傳訛。而莫或止（三）也。群當易以芹。非當易以威。知徹牀孃四字宜廢。圭缺群危四字宜増。樂安陳晉翁。以指掌圖爲之節要。卷首有切韻須知。于照穿牀孃下注曰。已見某字母下。于經堅輕牽擎虔外。出扃涓傾圈瓊拳。則宜廢宜増。亦已瞭然。草廬發此論端。可謂卓識。然非豈可易威。威乃喉聲影母。非乃輕唇殊不相及。趙凡夫又言母有不足。補其輕重。見溪群疑。曉匣影日。則補干開喬危。好敍賏習。喩來則補運离之類。熊與可亦欲加母。皆各見其一得。終非定論。欲加母者。以迮狀不明也。呉敬甫則減母用三十一字。葉敬君則用三十字。（韻表依士明訣。減知徹澄孃敷疑。故用三十。切韻樞紐。止減知徹澄孃敷。而以微附喩下。故用三十一。）張洪陽惟用二十字。以早梅詩約之曰。東（端）風（非夫奉）破（滂竝）早（精）梅。（明）向（曉匣）暖（泥孃）一（疑影喩）枝（知照）開。（溪群）氷（幫）雪（心邪）無（微）人（日）見。（見）春（徹澄穿床）從（清從）天（透定）上（審禪）來。（來）李如眞則平聲母用三十一字。仄聲母用二十一字。（書文音義便考曰。三十六母。除知徹澄孃非五重母。惟用三十一字。而聲有清濁。如通清同濁。荒清黄濁是也。三十一母中。見幫端照精五母。皆有清而無濁。疑微明泥（四）來日六母。皆有濁而無清。此外溪與群。曉與匣。影與喩。敷與奉。滂與平。透與廷。穿與床。審與禪。清與從。心與邪。二十母。皆一清一濁。如陰陽夫婦之相配焉。

然惟平聲。不容不分清濁。仄聲止用清母。悉可該括。故并去十濁母。惟用見溪疑曉影奉微邦平明端透泥（五）來照穿審日精清心二十一字。履按清濁即啞噎也。但平仄之切。止須分韻之啞噎。何必分母之啞噎乎。）蕭氏尺木。用二十字。則取張説也。切韻（六）聲原讀曰。幫滂（竝）明。見溪（羣）疑。（影喩）曉（匣）夫（非奉）微。端透（定）泥。（孃）來。精清（從）心。（邪）知（照）徹（穿澄床）審。（禪）日。可謂省易矣。履按增母而不減。舊母實多雷同。減母而不增。各母俱有異狀。故聲原母止二十。又定粗細之狀四十七。母各二狀。而微惟一狀。見溪疑曉。則有四狀。（或謂知照非夫終別。知以舌卷舐中腭。而照乃伸舌就上齒内。而微縮焉。今以知爲細狀。照爲粗狀。則可括一母矣。非爲外唇之最輕聲。以上齒壓下唇。而氣挨下唇出聲。出聲則唇即開。夫則始終不開唇。唇中微有縫。放聲出耳。今以非爲細狀。夫爲粗狀。則可括一母矣。然字中用非音者寔少（七）。）約爲宮倡商和。（凡音在唇腭中。皆謂之宮。音穿齒外。皆謂之商。）凡音皆備。而不相混。最爲精確。所以與温首座剖析。若曰温之法爲定法。則華厳不當用四十二字。金剛頂不當用五十字。悉曇不當譯五十二字。舍利不當用三十字。耶蘇不當用五十母。而統於五聲矣。膠泥者。何可與言此（八）。

切母各狀（專取眞（九）文恩庚青蒸侵之韵而帖切諸母以其字多而聲狀皆備無迫迮窘紐之苦）

宮倡（羽角總謂之宮）

奔（幫粗）	兵（幫細）	（唇最動故領宮倡之首）	
烹（滂粗）	平（滂細）		
門（明粗）	明（明細）		
庚（見粗）	京（見細）	肱（見粗）	君（見細）
阬（溪粗）	輕（溪細）	坤（溪粗）	羣（溪細）
恩（疑粗）	因（疑細）	温（疑粗）	云（疑細）
亨（曉粗）	欣（曉細）	昏（曉粗）	熏（曉細）
氛（非粗）	分（非細）		
文（十）（微無粗）	文（微細）	（非微二狀中原少用）	

唇腭激喉在中爲一類二十五狀

商和（徵商總謂之商）

登（端粗）	丁（端細）	
騰（透粗）	汀（透細）	
能（泥粗）	寧（泥細）	
倫（來粗）	零（來細）	（來字乃泥之餘）

尊（精粗）　　精（精細）(十一)
㝡（清粗）　　清（清細）(十一)
孫（心粗）　　心（心細）(十一)
諄（知粗）　　眞（知細）
春（徹粗）　　嗔（徹細）
醇（審粗）　　申（審細）
㓜（日無粗細而有㓜人二狀）　　人　　（日字乃禪之餘）
舌齒用喉穿外爲一類二十二狀

Ⅱ　テキスト間の異同

(一)（授）は「金」を「今」に作る。
(二)（授）は「凝」を「疑」に作る。
(三)（昭）は「止」を「正」に作る。
(四)（授）は「泥」を「尼」に作る。
(五)（授）は「切韻」を欠き、たんに「聲原」とする。
(六)（授）は「寔多」を「實少」に作る。
(七)（昭）は「何可與言此」を「何可與言此也」に作る。
(八)（授）は「眞」を「具」に作る。
(九)（昭）は「文」を「焚」に作る。
(十)（授）は「精細」・「清細」・「心細」をそれぞれ「細」に作る。
(十一)（授）は「二」を「一」に作る。

3　訳注

Ⅰ　和訳

字母の増減

等韻学は、元魏時代の僧侶神珙によって始めて明らかになった（1)。しかし三十六字母は、『崇文総目』が言うところでは、唐の守温の撰だとのことであり（2)、呂維祺（字介孺）が言うところでは、大唐の舎利が字母三十を創り、後に温首座が「孃・床・幫・滂・微・奉」の六母を増したとのことである（3)。ということは、この法は、増したり減らしたりすることが可能だということになる。恐らく、等韻学の来源は、初めは翻訳によって出来上がったのだろう。訳された文

字には必ず方言が関わっていて、今の音とは読み方が異なっていたに違いない。例えば、今の発音では、「孃」母と「疑」母、「喩」母と「影」母の間に区別があろうはずはない。（呂維祺〔字介孺〕は、「泥」母は「舌頭」で、「孃」母は「舌上」だと言っている（4）が、間違いである。「孃」母が「斉」韻に入れば自ずと「泥」母になるのだ（5）。「穰」を発音すれば「日」と同じになり、「嘗」を発音すれば「審」と同じになる。思うに、「穰」と「嘗」との中間に発音されるのだ。「知・徹・澄」の順に発音して行くと、「嘗」字の音に似てくる（6）。「知・徹・澄」が「照・穿・床」に類する以上、どうして「孃」が「禅・審」と類せずにいられようか。そのようになる理由はといえば、劉牧〔字長民〕と胡一桂〔双湖居士〕は、「河図」が「洛書」に変じる際、「金」と「火」の位置が入れ替わると言っているが、「徵」・「商」はそれぞれ「金」と「火」に適応するので、そのために、「舌」と「歯」とは通じ合うのである（7）。呂維祺〔字介孺〕は、「疑」には訛って「夷」と発音される場合があると言っている（8）。思うに、「疑」母の発音は、力を入れて（舌を）口蓋（上顎）に固着させ、声を両側の奥歯の間に放たねばならず、他方、「喩・影」母は、単に喉から出る音を引き延ばすだけで上顎とは関係しないのである。これを傍証するのが「凝」字である。『儀禮』で「疑立」と書かれているのはすなわち「凝立」のことである（9）。そうだとすると、「疑」と「凝」とはまた「泥」母とも同じであるのだ。『説文』や『唐韻』を調べてみると、「安」・「恩」・「咢」・「悪」・「襖」・「昂」等の字はすべて、「烏」字や「五」字を「切響」としている（10）。今の人はその半ばを「腭」声としているが、陸法言や孫愐たちはもともと区別していなかったのである。）故に劉鑑（字士明）の歌訣に、「知と照、非と敷は通じ合い、泥と孃、穿と徹は用いる時は同じ。澄と床、疑と喩は連続する。六母が交われば行き詰まる。」と言っている（11）。呉澄（字幼清）は、「三十六字母は、俗間ではもともと訛ったものを伝えているのだが、誰もそれを廃止することができていない。「群」は「芹」に取り替えるべきだし、「非」は「威」に取り替えるべきだ。「知・徹・牀・孃」の４字を削り、「圭・缺・群・危」の４字を増補すべきだ。」と言っている。楽安の「陳晋翁」は、『切韻指掌図』のために「節要」を書いたが、その巻首に「切韻須知」があり、その「照・穿・牀・孃」の下に「既に某字母の下に見える」と注している。また、「経・堅・軽・牽・擎・虔」とは別に、「扃・涓・傾・圈・瓊・拳」を出している（12）。このように、字母には廃止すべきものと増補すべきものがあることが、既に明瞭になっているのだ。呉澄（号草廬）が議論の発端となったのは、卓識と言われねばならない。しかし、「非」母がどうして「威」と取り替えられようか。「威」は喉音の「影」母だし、「非」は「軽唇」であって、全く違い、関連がない。趙宧光（字凡夫）はまた、字母には不足したものがあると言い、その軽重を補充している（13）。すなわち、「見・溪・群・疑」・「曉・匣・影・日」には、「干・開・喬・危」・「好・敍・眼・習」を補い、「喩・来」には「運・离」を補っている類がそうである。熊朋来（字與可）もまた、字母を増加させようとした（14）。どの説にもそれぞれ長所があるが、ついに定論となるには至っていない。字母を増加しようとするのは、「迮状」が不明なた

めである。呉元満（字敬甫）は字母を減らして三十一字を用いようとした。葉秉敬（字敬君）は三十字を用いている。（『韻表』は劉鑑〔字士明〕の歌訣により、「知・徹・澄・孃・敷・疑」母を減らしており、故に三十字を用いている（15）。呉元満の『切韻枢紐』は「知・徹・澄・孃・敷」を減らし、「微」を「喩」の下に附けているので、三十一字を用いている（16）。）張位（張洪陽）は二十字だけしか用いず、「早梅詩」によって、これを簡約して次のように言う。すなわち、「東（端）風（非夫奉）破（滂並）早（精）梅。（明）向（暁匣）暖（泥孃）一（疑影喩）枝（知照）開。（溪群）氷（幫）雪（心邪）無（微）人（日）見。（見）春（徹澄穿床）従（清従）天（透定）上（審禅）来。（来）」と（17）。李登（号如眞）は平声の字母には三十一字を用い、仄声の字母には二十一字を用いる。（『書文音義便考』では、「三十六字母は、『知・徹・澄・孃・非』の５母は字母が重複しているので、ただ三十一字を用いればよい。しかし、声には清濁の区別がある。例えば、『通』は清で『同』が濁であり、『荒』が清で『黄』が濁であるのがそうである。三十一字母の中で、『見・幫・端・照・精』の５母はみな、清のみあって濁がない。『疑・微・明・泥・来・日』の６母はみな、濁のみあって清がない。その他は、『溪』と『群』、『暁』と『匣』、『影』と『喩』、『敷』と『奉』、『滂』と『平』、『透』と『廷』、『穿』と『床』、『審』と『禅』、『清』と『従』、『心』と『邪』の20母は、みな片方が清、片方が濁の対をなしていて、あたかも陰陽夫婦が配偶されている如くである。しかし清濁を区別しないわけにゆかないのはただ平声のみであって、仄声は清の字母さえ使えばすっかり該括できる。故に仄声においては10個の濁字母を除去し、ただ『見・溪・疑・暁・影・奉・微・邦・平・明・端・透・泥・来・照・穿・審・日・精・清・心』の二十一字を用いる。」と言っている（18）。履が考えるに、ここで言う「清・濁」とはつまり「啌・喤」のことである。しかし、平声・仄声ともに、反切においては、韻の「啌・喤」を区別すればよいのであって、必ずしも字母の「啌・喤」を区別するには及ばないのである。）蕭雲従（字尺木）が二十字を用いている（19）のは、張説を採用したものだ。『切韻聲原』が字母の読みを、「幫滂（竝）明。見溪（羣）疑。（影喩）曉（匣）夫（非奉）微。端透（定）泥。（孃）來。精清（從）心。（邪）知（照）徹（穿澄床）審。（禪）日。」としている（20）のは、簡略で平易というべきである。履の考えでは、字母を増補して減らさない場合、これまでの字母説は、実のところ、独自の見解を持たずに付和雷同したものが多い。一方、字母を減らして増補しないやり方では、それぞれの字母が異なる「状」の音節を統括することになる。故に『切韻声原』では字母を二十のみとし、それぞれに「粗・細」の「状」47種を定めたのである。字母毎に２種類の「状」があるが、「微」母は１「状」のみ、逆に、「見・溪・疑・暁」母にはそれぞれ４つの「状」が備わっている（21）。（ある人々は、「知」と「照」、「非」と「夫」には最終的に区別があると言っている。彼らによると、「知」は舌を巻いて口蓋の中央（上顎の中部）を舐めるのであり、「照」は舌を伸ばして上の前歯の内側に着け、わずかに縮めるのだという（22）。今は、「知」は「細状」、「照」は「粗状」であって、字母としては１つに括ることができるとする。また、「非」は「外唇」

の最も軽い声であり、上の歯で下の唇を押さえ、息が下の唇すれすれに通ることで声を出す。声が出れば、すぐに唇は開く。「夫」のほうは、終始唇は開かず、唇の間に小さな隙間があって、声はそこから放たれる（23）。今は、「非」は「細状」、「夫」は「粗状」であって、字母としては１つに括ることができるとする。しかし、字の中で「非」の音を用いるものは誠に少ない。）これを約して「宮倡・商和」と言う。（およそ発音の位置が唇・口蓋（上顎）の中にあるものはみな「宮」と言い、音が前歯を穿って外に出るものはみな「商」と言う。）すべて音が完備していて、混同されることがないものが、最も精確なのである。だから、温首座（守温）の分析に与して、もしも守温の方法を定論とするならば、『華厳経』は四十二字を用いる（24）べきではなく、『金剛頂経』は五十字を用いる（25）べきではなく、「悉曇」は五十二字で訳される（26）べきではなく、舎利は三十字を用いる（27）べきではなく、耶蘇（『西儒耳目資』）は五十字母を用いて、「五声」に統括する（28）べきではなかったということになってしまう。これほどまでに膠泥している者たちとは、このような問題を議論することはとてもできない。

Ⅱ　注

(1) 方中履のここの部分の記述を引用している文献に、清の戴震の『声韻考』巻一「反切之始」の「附考」がある。同「考」では、これに先だって次ぎのような考証がなされている。

「王應麟玉海曰、玉篇卷末附以沙門神珙五音聲論四聲五音九弄反紐圖。按、此亦不知何時所傳。王伯厚歸之神珙、攷珙自叙不一語渉及五音聲論。殆唐末宋初或雜取以附玉篇後、非珙之爲。

……（中略）……。

又按、今人言切韵、但知推本神珙、以爲來自西域。蓋釋氏之專習字母等韵者推本所起咸出于珙耳。因誇誕其學造爲傳自西域之説、而指珙爲北魏時人。俗學膚淺、不知魏李登聲類、晉呂静韵集、韵學實始萌芽。又不知魏有孫叔然始作反音。故猥稱前乎休文、即可爲中土有切韵之先倡。珙反紐圖自叙云、昔梁沈約剏立紐字之圖、唐又有陽寧公南陽釋處忠、又撰元和韵譜。然則珙雖未詳何時人、固在唐憲宗元和以後矣。」

宋刻以後の『玉篇』には「五音声論」と「四聲五音九弄反紐図」が附載されており、神珙といえばその「四聲五音九弄反紐図」の序の作者として知られているが、明から清にかけて、この神珙を中国における等韻学の開基人と仰ぎ、（「四声譜」の作者であり、かつ『切韻』の作者と誤認されることのある）沈約（字休文）よりも前の北魏時代の人とみなす説が広く行われていたことがわかる。

(2) 昨年の拙稿「方中履『切字釈疑』「切韻当主音和」の条を読む（「切字釈疑」訳注２）」の注(2) においても紹介したが、『崇文総目』は北宋時代の作であるが、現存のテキストは、後に『永楽大典』から輯佚されたものであり、それには字母に関する守温の著作は見えていない。守温の

「三十六字母」に関しては、宋・王応麟の『玉海』に書名「三十六字母圖一卷僧守温」(『玉海』巻四十四「藝文」「小学」) が著録されていることが、資料としては代表的なものであろう。

(3) 明の呂維祺 (字介孺又字豫石　1587～1641　河南新安の人) の『音韻日月燈』(1633成書) は「介孺氏曰、大唐舍利創字母三十、後温首座益以孃床幫滂微奉六母、是爲三十六母。」(「同文鐸」巻首「音辨二」) と記述している。2009の拙稿の注 (2) を参照。

(4) 上記『音韻日月燈』「同文鐸」巻首「音辨三」に次のような叙述が見えるが、このような箇所を指していったものだろうか。

「介孺氏曰、……、泥屬舌頭、當讀在舌之頭、如本母下字難能之類、世皆讀如牙音者誤。舌上四母惟孃與泥微相肖、須于舌頭舌上辨之。……。」

(5)「孃母が斉韻に入れば自ずと泥母になる」とは、字母に選ばれている「孃」・「泥」の文字じたいの発音を指して言ったものだろう。すなわち、「泥」字には、『広韻』で、平声斉韻開口泥母「奴低切」と、去声霽韻開口泥母「奴計切」の２音があるが、平声の読音のほうはまさに「斉」韻の音であるから、ここでは「泥」と「孃」の声母になんら違いはないということを言っているかのようである。

(6)『広韻』では、「穰」・「嘗」の２字の音は次の通り。

「穰」平声陽韻開口日母「汝陽切」上声養韻開口日母「如兩切」

「嘗」平声陽韻開口禅母「市羊切」

すなわち、いずれも韻母は陽韻系で、「穰」は日母、「嘗」は禅母だが、禅母が審母と合流している故に、「嘗」は審母という結論がでてくるのだろう。実はこれに類する記述は、既に「切韻声原」の中でなされており、それは「切韻声原」の三十六字母及び著者自身の考案する二十六字母 (実質上は二十一字母) の表の解説の中に登場するもので、原文は次の通りであるが、ここに見えている「孃則嘗穰之間耳」という記述が、本節と同様の認識を示しているのではあるまいかと思われる。

「細別：知以舌卷舐中腭，而照乃伸舌就上齒内而微縮焉，愚謂若氊專之類也，孃則嘗穰之間耳。疑喩之分，謂疑用力斬腭，聲横牙間，而喩影但虚引喉，與腭無涉也。儀禮「疑立」即「凝立」，故儗嶷從之。如眞是以存影，然疑凝則同泥矣。其以角收轉爲宮發乎？　愚攷孫、陸于安、恩、咢、昂等，俱用五字、烏字作切響，而今半作腭聲，果古未精但趨近似耶？」

泥母となんら違いの認められない孃母が、日母と審母の間にあるというのは具体的にどういう発音を指しているのか、理解が難しい。後にも引用する時建国「《切韻聲原》研究」(『音韻論叢』中国音韻学研究会・石家荘師範専科学校編　2004斉魯書社　pp.444～479) では、「切韻声原」の音韻体系における泥・娘母は単純に [n] と推定されているのであるが。

(7) ここで方中履は、「河図」・「洛書」に基づく五行説から、舌上音と正歯音の合流を正当化する論を提出していると見られる。2009の拙稿「方中履『切字釈疑』「等母配位」の条を読む (「切字

釈疑」訳注1)」で見たように、舌音（宮商角徵羽の徵）は五行の「火」に、歯音（同じく商）は「金」に配当される。ここで言及されている２人の学者、宋の劉牧（字長民）には『易数鉤隠図』、「双湖居士」元の胡一桂『周易本義附録纂注』・『周易啓蒙翼伝』の著があり、いずれも『通志堂経解』に収められているが、『周易啓蒙翼伝』上篇の「河図洛書」の条に掲載されている「河図」・「洛書」の図を見ると、「河図」では「火」に該当する「二・七」が南にあって、「金」に該当する「四・九」が西にある。一方、「洛書」では「金」の「四・九」が南、「火」の「二・七」が西に来ているから、「河図」と「洛書」における五行の方位はこの両者が逆になっているわけで、同条にも「一居北、六居西北、三居東、八居東北、五居中、與河圖之位數合。至於九自居南、四自居東南、七居西、二自居西南、二方之數視河圖實相易置焉。」と言われているのが、そのことを指したものと思われる。しかし、上掲の３著で見る限り、劉牧にも胡一桂にも、この火と金の位置の逆転を音韻上の舌音と歯音の相通に関連づける叙述は見あたらないので、筆者は、ここで引用されている劉・胡の学説は「河図」・「洛書」における「火」と「金」の位置に関する指摘だけをしたものであり、後半部分の論証は方中履自身のものだと考えて、和訳を作成した。方中履は、五行説における「火」と「金」との関係の密接さや相互の転換が可能なことから、それらに対応する舌音と歯音の関係の密接さをも正統化しようとしたものらしい。

(8) 呂維祺『音韻日月燈』「同文鐸」巻首「音辨三」に次のような叙述が見える。

「諸母牙音中見溪群三母易明、惟疑母有訛呼作夷者。此母一謬、則以宜爲移、銀爲寅、牛爲尤、弊不可勝道。即作指南者亦謂疑喩相通矣。夫疑魚其切、夷緜其切、牙喉固有辨也。」

なお、『広韻』では「疑」は平声之韻所属字（「語其切」）、「夷」は平声脂韻所属字（「以脂切」）で、「夷」の声母は以母（喩母四等）である。また、声母の混同の例として挙げられている「移」と「寅」は以母（喩母四等）、「尤」は云母（喩母三等）の字である。

(9) 先の注（6）にも引用した通り、ここで述べられている「疑」母と「喩・影」母の発音方法と、『儀禮』に見える仮借の例は、「切韻声原」の記述を踏襲していると見られる。すなわち、「切韻声原」の、「疑喩之分，謂疑用力斬腭，聲横牙間，而喩影但虚引喉，與腭無渉也。儀禮「疑立」即「凝立」，故儗嶷從之。如眞是以存影，然疑凝則同泥矣。」という記述がそれである。なお、『儀禮』の「疑立」の出典は、「公食大夫礼」に「公立于序内、西郷。賓立于階西。疑立」とあるのを指すと思われる。鄭玄注に「疑正立也」とある。ここで「疑」と諧声系列を成す例字として挙げられている「凝」・「儗」・「嶷」の字音は、『広韻』では次の通りであるが、

「凝」平声蒸韻開口疑母「魚陵切」・去声證韻開口疑母「牛餒切」

「儗」上声止韻疑母「魚紀切」・去声志韻疑母「魚記切」・去声代韻疑母「五溉切」・去声代韻暁母「海愛切」

「嶷」平声之韻疑母「語其切」・入声職韻開口疑母「魚力切」

ちなみに、現代北京音ではこれらの発音はそれぞれ、níng,nǐ,nǐとなっていて、いずれも零声母に

ならず、鼻音性を保存して泥母と合流している字である。

(10) ここもまた先の注 (6) で引用した「切韻声原」の記述を下敷きにしている。すなわち、「愚攷孫、陸于安、恩、咢、昂等，俱用五字、烏字作切響，而今半作腭聲，果古未精但趨近似耶？」という記述がそれである。但し、「五」や「烏」を反切上字に使用している文字の例としては、方中履の挙げる例のほうが、「切韻声原」のそれより２字多い。なお、両方氏が使用している「切響」の語は、反切上字を指すものと思われるが、この用語の解釈にあたっては、「切韻声原」の「論古皆音和説」で次のような記述が見えることが参考になろう。

「切響期同母（切上一字），行韻期叶而已（切下一字）。」

下記に、ここで例示されている「安」以下の各字の『広韻』と大徐本『説文解字』における反切を記しておく。

「安」　『広韻』「烏寒切」（平声寒韻影母）
　　『説文』「烏寒切」（七篇下「宀」部）
「恩」　『広韻』「烏痕切」（平声痕韻影母）
　　『説文』「烏痕切」（十篇下「心」部）
「咢」　『広韻』「五各切」（入声鐸韻開口疑母）
　　『説文』「五各切」（二篇上「叩」部）
「悪」　『広韻』「烏各切」（入声鐸韻開口影母）・「烏路切」（去声暮韻影母）・「哀都切」（平声模韻影母）
　　『説文』「烏各切」（十篇下「心」部）
「襖」　『広韻』「烏晧切」（上声晧韻影母）
　　『説文』「烏晧切」（八篇上「衣」部新附）
「昂」　『広韻』「五剛切」（平声唐韻開口疑母）
　　『説文』「卬」「伍剛切」（八篇上「匕」部）

(11) ここで引用されている歌訣の文言は、元・劉鑑（字士明）の『経史正音切韻指南』の巻首に掲載されている「交互音」という歌訣と一致している。なお、本節の後の部分で葉秉敬の『韻表』が「劉士明の歌訣に依って」、「知・徹・澄・孃・敷・疑」の六母を減らした三十字母を採用したと述べられていることがこれと関連する。注 (15) を参照。

(12) 楽安（元の江西行省撫州路所属。現江西省楽安県）の人、陳晋翁の「切韻指掌図節要」は伝わらないが、元の呉澄（字幼清　1249～1333　撫州崇仁の人＝現江西省崇仁県）の「切韻指掌図節要序」から呉氏自身の意見とともにその内容をうかがい知ることができる。同「序」は呉氏の著作集である『呉文正集』（「四庫全書」所収）巻十七に収録されている。今、その全文を引用すると、下記の通りであって、この方中履の叙述は、ほぼ全面的にこれによっているようである。

「聲音用三十六字母尚矣。俗本傳訛而莫或正也。羣當易以芹、非當易以威、知徹牀娘四字宜廢、

圭缺羣危四字宜增。樂安陳晉翁以指掌圖爲之節要、卷首有切韻須知、於照穿牀娘下註曰、已見某字母下。於經堅輕牽擎虔外、別出扃涓傾圈瓊拳。則宜廢宜增、盖已瞭然。晉翁純篤力學、至老不倦。豈徇俗踵訛者所敢望哉。故其著述有見如此。而余之爲是言亦可與言而與之言也。」

この呉氏の叙述によれば、「經堅輕牽擎虔」と合口系の「扃涓傾圈瓊拳」とを字母の――各字の字音の性格からしてこれらはむしろ「助紐字」的なものと思われるが――レベルで区別するのは「切韻指掌図節要」が採用している方法であって、呉氏はこれに賛同して、「群」母のかわりに「芹」母を置き、（おそらく「見・渓・芹・疑」の他に）合口系の「圭缺羣危」を出すことを提唱している。また、（おそらく「照・穿・澄・泥」と重複する）「知・徹・牀・娘」を除くことも主張している。しかしこの叙述だけでは、どうして「照・穿」と同系列の「牀」が省かれているのかは判然としない。また「牀」を省くことが「禅」母とどういう関係にあるのかも判然としない。

(13) 明の趙宧光（字凡夫　1559～1625　呉の人）の音韻の著作はほとんど残っていないが、主著である『説文長箋』巻首の「長箋解題」に収められた著作解題からおびただしい数にのぼる著述の標題と内容の一端をうかがい知ることができる。字母に関する記述が見えるのは、そのうち「正俗通聲譜」と題する著作の条である。同著作はどうやら字書的な性格のものらしいが、見出し字が発音順配列になっているらしいのである。その発音の分類が、同条によると次のような方法でなされているという。

「以十二聲爲一類、八聲爲一類、四聲爲一類、三聲爲一類、中聲爲一類、内聲爲一類。凡六類敍二十卷。隨以輕重爲等、清濁爲次、幖母爲首。而坿沈韻四聲于下。母韻相乗、字字成切。母所不足、補其輕重。見谿群疑曉匣影日（八輕）則補干開喬危好敍賏習（八重）、諭來（二重）則補運离（二輕）之類。」

この「母所不足、補其輕重。」より後の記述は方中履が引用しているのとほぼ同文である。

(14) 元の熊朋来（字與可　13～14世紀　豫章の人）は、『通志堂経解』に収録された「熊氏経説」等の著作で名高い学者であるが、音韻関係の内容の著作で伝世のものがあるかどうか、寡聞にして知らない。従って、今のところ筆者にとっては、方以智の「切韻声原」が、歴代の学者たちによる字母の増減の経緯を概観して、次のように述べているのが、わずかにその資料となりうるのみである。

「呉幼清、陳晉翁、熊與可、趙凡夫皆欲加母，以迮狀不明也。呂獨抱、呉敬甫皆廢門法。張洪陽定二十字，李如眞存影母，括二十字，謂平有清濁，仄唱不用，故以清兼濁，此即指啞陰噎陽也。但未明前人何以訛耳。蕭尺木取張説也。」

方中履は、前人たちが字母を増補する原因について、ここに見える「欲加母，以迮狀不明也。」という見解に賛同し、この表現そのものをも踏襲しているわけである。

(15) 明の葉秉敬（字敬君　浙江衢州の人）の『韻表』（1605成書）の「凡例」に次のような１条がある。

「二辯聲母

舊韻用三十六字母、聞之上官萬里曰、自胡僧了義以三十六字爲翻切母、奪造化之巧、司馬公指掌圖、爲四聲等子、蒙古韻、以一聲該四聲、皆不出了義區域、信斯言也。字母之設、蓋入巧也、實天工也。乃愚削其六、止用三十、曰、見溪群、端透定泥、幫滂並明、非奉微、精清從心邪、照穿牀審禪、曉匣影喻、來日、是也。其六母、曰、知徹澄孃敷疑。何以削之。蓋昔人已知其重出之弊、而爲之詩曰、知照非敷遞互通、此以明有照有非則知敷可削也。泥孃穿徹用時同、此以明有泥有穿則孃徹可削也。澄牀疑喻相連屬、此以明有牀有喻則澄疑可削也。故終之曰、六母交参一處窮、愚之止用三十母也以此。」

方中履の言う如く、『切韻指南』の「交互音」の歌訣が自説の補強のために引証されていることがわかる。

(16) 明の呉元満（字敬甫　歙県の人＝現安徽省歙県）の「切韻枢紐」は稀見書である。永島榮一郎「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料について（続）」（『言語研究』九号 1941）によると、永島氏が所蔵する呉元満著の韻書『萬籟中聲』に「切韻樞細」（万暦壬午＝1582自序）という韻表が附されているという。同論文によれば、『萬籟中聲』の声類は次のようになっている。

「先づ本書の聲類に就いて述べるに、『萬籟中聲』の目録中に『三十一字母反切式』と云ふものがあり、各聲母に四字づゝの字母を示してゐるが、今その最初の一字母で代表させると次の如くなる。

見溪群疑端透定泥幇滂並明精清從心邪照穿牀審禪曉匣影喻非奉微來日

そして各韻中で標識として掲げた字母も少數の例外はあるが、この三十一字母を使用してゐる。」

筆者は「切韻枢紐」（或いは「切韻枢細」）も『万籟中声』も未見であるが、おなじ著者の『六書総要』巻末に附載された「諧声指南」もまた、その「凡例」で述べるように「三十一字母」を採用しており、その内訳は、「目録」に現れた字母名を見る限り、上記の永島氏の出しているものと一致する。すなわち、

見溪群疑端透定泥幇滂並明精清從心邪照穿牀審禪曉匣影喻非奉微來日

の31種であって、「諧声指南」の場合これらの字母を「全清・次清・次濁・全濁」の順に配列していることが興味深い。すなわち、

見端幇精照影非　溪透滂清心穿審曉　疑泥明微來日喻　群定並從邪牀禪匣奉

このような順番で配列されている様子なのである（但し、それぞれのブロック内での順序が若干一定しないところも見られた）。

(17)「張洪陽の早梅詩」は、第２節「切韻当主音和」の条でも言及されているが、声母の代表字をおのおの１度ずつ用いて作られた五言詩形式の字母で、「東風破早梅、向暖一枝開。氷雪無人

見、春従天上来。」という二十字からなり、明代の北方話の声母を反映するものとされる。文献に見える例としては、明の蘭茂（1397～1476　雲南の人）の『韻略易通』が巻首に掲載しており、方中履がその作者と目しているらしい明の張位（張洪陽　1540頃～1600頃　豫章の人）は、その著『問奇集』の「一、早梅詩切字例」の条で、これを、助紐字及び解説を附して紹介している。

(18) 明の李登（字士龍、号如真　上元の人＝現南京市江寧県）は梅膺祚の『字彙』巻末に掲載されている「韻法横図」の作者李世沢（字嘉紹）の父である。李登の『書文音義便考私編』では、方中履の説明する通り、平声に三十一字母、仄声に二十一字母が立てられている。三十六字母から「非・知・徹・澄・孃」の５母を廃した上、旧全濁音節が平声で陰陽の２調に分岐していることを反映させて、平声においては全濁音の字母を残し、仄声についてはそれを省くという手法である。同書巻首の「書文音義便考私編目録」から「字母」に関連する条を引用すれば、次の通りである。

「平聲字母

見　溪　羣　疑　曉　匣　影　喻（此八字爲一類、皆喉音。）

敷　奉　微（此三字爲一類、乃脣齒半音。）

邦　滂　平　明（此四字爲一類、皆脣音、内平字舊係並字。）

端　透　廷　尼　來（此五字爲一類、皆舌頭音、内廷字舊係定字。）

照　穿　牀　審　禪　日（此六字爲一類、正齒音。）

精　清　從　心　邪（此五字爲一類、皆齒舌半音。）

共三十一母、舊多知徹澄孃（即娘字）非五母、知重照、徹重穿、澄重牀、孃重尼、非重敷、重母下字、無非同音、不知其説、茲用三十有一而足。

辨清濁

清濁者、如通與同、通清而同濁、荒與黄、荒清而黄濁、是也。三十一母中、見邦端照精五母、皆有清而無濁、疑微明尼來日六母、皆有濁而無清、除此十一母外、其餘溪與羣、曉與匣、影與喻、敷與奉、滂與平、透與廷、穿與牀、審與禪、清與從、心與邪、十項、皆一清一濁、如陰陽夫婦之相配焉。然惟平聲不容不分清濁、仄聲止用清聲、悉可該括、故並去十濁母、以從簡便。

仄聲字母

見溪疑曉影　奉微邦平明　端透尼來

照穿審日　　精清心

共二十有一而足。」

方中履は、この「平聲字母」の解説と次の「辨清濁」の条から引用していることがわかる。

なお、上の注（14）で引用した通り、注（17）で挙げた張位やこの李登の字母説についても、既に「切韻声原」が言及している。関連する叙述を抜き出せば次の通り。

「張洪陽定二十字、李如眞存影母、括二十字、謂平有清濁、仄唱不用、故以清兼濁、此即指啌陰

喨陽也。」

(19) 清·蕭雲従（字尺木　1596～1673　蕪湖の人＝現安徽省蕪湖県）の『韻通』は、巻首に掲げる「一　約二十字母辨神珙三十六母之非」の条の中で、次のように、三十六字母の中から重複字母を削減することを主張している。

「(前略)

夫見溪羣疑、羣与溪同、乃刪羣。端透定泥、定与端同、乃刪定。幇滂並明、並同幇、乃刪並。精清從心邪、清同從、心同邪、乃刪清邪、知徹澄孃照穿床審禪、知同照、徹同穿、床澄同審同禪、乃刪知徹澄孃穿禪審、曉匣隱喩、匣同曉、隱喩同疑、乃刪匣隱喩、方夫鳳微、夫同方、鳳同微、乃刪方微、來日別如之、……」

同条はさらに、この後の部分で、自身の説による二十字母の一覧を掲げている。前の方の一覧は、伝統的な三十六字母の代表字を捨てて別の代表字を採用したもの。後の方の一覧は、伝統的な用字に拠り、細字で併合された字母を横に注記している（ここではかっこに入れて示す）が、その用字はところどころ上に引用した解説中のそれと一致しないところがあるようだ。

「貢　瓊　維　帝　統　凝　寶　丕　民　宗　蒼　雪　瞻　春　石　華　鳳　舞　浪　茸

見溪（羣）疑（喩影）定（端）透泥（孃）幇（並）滂明精從（清）心（邪）照（知）穿（徹澄床）審（禪）曉（匣）方（鳳夫）微來日」

なお、上記の引用には『続修四庫全書』本の『韻通』を使用したが、同テキストが抄本であるため、くずし字の判読にあたって誤ちを犯した恐れなしとしない。間違いをご指摘頂ければ誠に幸いである。

なお、方中履が「蕭氏尺木用二十字、取張説也」と述べて、蕭氏の二十字母説は張位が「早梅詩」で示した説に倣ったものだと指摘しているのも、注（14）で引いた「切韻声原」の叙述の最後に見える一節「蕭尺木取張説也。」を踏襲している。

(20) ここで方中履が掲げている「切韻声原」の二十字母は、「切韻声原」が、注（14）に引用した叙述のあとで掲載している「簡法二十字」と配列順序が異なるものの、併合された字母の注記などはほぼ一致している。「切韻声原」の「簡法二十字」の全文は次の通りである。

「見　溪（羣並）　疑（影喩）　端　透（定）　泥（孃）　幫　滂（並）　明　精　從（清）　心（邪）

知（照）　穿（徹澄牀）　審（禪）　曉（匣）　夫（非奉）　微　來　日

此簡法二十字

（知照第二層互用。）

（孃讀穰同日、讀嘗同審。）」

なお、汲古書院影印の和刻本『通雅』では、「溪」母の注は「羣幷」である。「ここでは『溪』母に旧『群母』を合わせる、以下の各注も同様だ」という意味であろうか。

(21)「切韻声原」は、注（20）に引用した「簡法二十字」の後に、本節「字母増減」の末尾に方

中履が掲げている「切母各状」とほぼ同内容の表を載せている。つまり、「切韻声原」や「切字釈疑」が言うところの「状」とは、各声母に接続する韻母を後に言う「四呼」と同様の基準で分類し、各声母がそのそれぞれと接続する状況を、別々にとらえた結果導き出される区別であるということができよう。

なお、「切韻声原」の表では、「精（精細）」「清（清細）」「心（心細）」の注（かっこ内の表現）はたんに「細」とのみなっていて、上で校合した（授）のテキストに一致する。また、「切韻声原」では、日母の最初の「状」を表す文字は、「忳」ではなくて「均」が使用されている。しかし、「忳」・「均」の字音を『広韻』で調べてみると、下記のようであって、

「忳」平声諄韻合口禅母「常倫切」・平声清韻合口群母「渠營切」

「均」平声諄韻合口見母四等「居匀切」

少なくとも禅母の音を持つ「忳」のほうが、日母の代表字に選ばれる可能性が高そうである。

(22) ここに見える「知」と「照」の発音の違いについての解説もまた、注（6）で引用した「切韻声原」の記述を襲用したものと見られる。すなわち、上記の引用文中に「細別：知以舌卷舐中腭，而照乃伸舌就上齒内而微縮焉，愚謂若氊專之類也」等とあるのがそれにあたる。この叙述に従えば、「知」の声母はそり舌音であるが、「照」の声母のほうはなお、[ʧ] や [ʨ] のような音であると認められているということだろうか。

(23) ここで説明されている「非」と「夫」の発音方法からすると、「非」字の頭子音は唇歯音の［ｆ］であるが、合口呼の韻母に連続すると思われる「夫」字の音節頭子音は、両唇間の摩擦音であると観察されているように思われる。

(24) 慶谷壽信「『字母』という名称をめぐって」（『日本中国学会報　第33集』1981）によると、「漢譯佛典では、文字のことをとりあつかったもの（字門説）が二十あまり知られている。それらは二系統に分かれ、その一つは四十二字門ないしはその變種、もう一つは五十字門ないしはその變種である。」その四十二字門の字門説を載せている経典の代表が『大方広仏華厳経』（「入法界品」）で、上記論文によれば、（唐の）「實叉難陀の『華厳經』に至って」これを「字母」という名称で呼んでいるという（大正蔵第十巻所収）。

(25) 上掲の慶谷1981によれば、唐の不空に『瑜伽金剛頂経釈字母品一巻』があり、五十字門の字母品を訳出している（大正蔵第十八巻所収）。

(26) 田久保周誉『批判悉曇學』（1944・1978真言宗豊山派宗務所）の第一篇第五章「悉曇字母論」によると、悉曇章に用いられる字母の数については、諸々の異伝がある。すなわち、「厳密な意味に於ける梵語の正統的字母表とすべき」字母説は四十七字母説であるが、その他、「相承悉曇學の悉曇章原型と見らるゝ」『悉曇字記』字母表の五十一字母、『金剛頂経釈字母品』等の五十字母、義浄の『南海寄帰内法伝』に言及されている四十九字母説、『方広大荘厳経示所品』に現れる四十六字母説などがある。但し、五十二字母説については、「涅槃經疏私記四に『其の悉曇章

を以て第一と爲し、中に於て五十二字を合す』といひ、三密鈔上にも胡地の字母を説いて『根本五十二字なり』といつて五十二字母説と見るべき説を擧げて居るが實證的に斯る字母説の實例を示す資料は存しない。」と言う。

(27) 注 (3) でも見たところの、明の呂維祺（字介孺、又字豫石）の『音韻日月燈』(「同文鐸」巻首「音辨二」) に言われている「大唐舍利創字母三十、後音首座益以孃床幫滂微奉六母、是爲三十六母。」という伝承を踏まえたものであろう。

(28) 明末のイエズス会士ニコラ・トリゴー（金尼閣・フランス人　1577～1628）の手になる韻書で、ラテン文字で中国語の音韻を表した『西儒耳目資』(1626成書) が採用している50の「字母」(韻母) と、５つの声調の区別を指したものと思われる。

４．おわりに——方中履の字母説

以上のように、この「字母増減」の条において、方中履が最も妥当だと認めている字母説は、父方以智が「切韻声原」の中で提唱する二十字母説である。これによれば、三十一字母説や三十字母説を採る人々が等しく削除する「知・徹・澄・孃・敷」等のほか、影・喩・疑母が合流し、全濁声母もすっかり消えるので、合計20個に落ち着き、「早梅詩」と同じものができあがる。そして、上記３の注 (21) でも述べたように、本節に附録された「切母各状」の表は、「切韻声原」が載せるものとほぼそっくりであるから、方中履は「切韻声原」が提唱する声母（或いは音節）の２大分類、すなわち唇・牙・喉音を「宮倡」、舌・歯音を「商和」とする手法も踏襲しているわけである。これは声母の発音の音声上の違いに基づいた分類であるようで、「切母各状」の表に記されるところでは「唇脣激喉在中爲一類。舌齒用喉穿外爲一類。」とのことであって、この文言は「切韻声原」のものと同じである。本文注に見える方中履自身の解説によれば、この違いとは「凡音在唇脣中。皆謂之宮。音穿齒外。皆謂之商。」ということであるが、これもまた「切韻声原」が言っているところを踏襲したものである。本稿では、上記３の和訳のように解釈してみたが、適切であるかどうか。

本節が説くところによれば、等韻学の発達の過程で、もはや現実の音とそぐわなくなった旧三十六字母に代わるものとして、字母を増補する説と、字母を削減する説とが、両方試みられた。しかし、字母増補説については、これを、「切韻声原」の言う「状」の類別を字母の中に組み込んでしまったものとして退けることができるのだという。但し、「切韻声原」を詳しく読み解いた先行研究によると、「切韻声原」における「状」の分類とは次のような性格のものであって、やはり「声母」の類別の範疇に属するものであると見なすほうが妥当であるらしい。例えば李新魁の『漢語等韻学』が述べるところは、次のようである。

“方氏还将各个声母分为“粗细”两状，见组声母则有四状（两粗两细）。所谓粗，是指与开口呼韵

母相拼之声母，所谓细，是指与齐齿呼韵母相拼之声母。见组声母的四状，实即与开、齐、合、撮四呼韵母相拼之声母。-----。与声母的四状相应，韵类方面则有翕、辟、穿、撮之分。并且在列图中以翕（合口）居首。合口字不多的韵，则以开口字居首。翕、辟、等的叫法，也相当于合、开、齐、撮。"(p.90)

また、時建国2004「《切韻聲原》研究」は次のように説いており、時氏は、方以智は声母と介音が合体した字母を案出しようとしているのではないが、声母が異なった介音の影響を受けた場合の音色の差異に基づく類別を行ったのだと解釈しているようである。

"方氏說:"其輕、重則曰粗聲、細聲。"從他在"切母各狀"中把"奔"定爲幫粗，"兵"定爲幫細，"肱"定爲見粗，"君"定爲見細等等看來，所謂粗聲，實際指與開口呼、合口呼相拼的聲母，細聲指與齊齒呼、撮口呼相拼的聲母。這是沿用呂坤《交泰韵》聲介合母的方法，把聲母分成了粗、細兩類，又別出心裁地把兩類聲母同翕辟結合起來，從而也構成了四呼的局面。

方氏既然把粗、細看成是輕、重的等量詞，-----。他的輕、重，與聽辨聲介合母的音樂有關。具體說來，由於粗聲母衹出現於開、合二呼韵，而開、合二呼韵沒有[i]、[Y](實際是[Yせ]) 介音，發音時口腔共鳴空隙大，此類聲母方式聽起來低而沈，故曰重。反之，齊、撮二呼韵有[i]、[Y]介音，發音時口腔共鳴空隙小，聲母聽起來高而揚，故曰輕。

這樣看來，聲母的粗細或輕重，是聲韵結合時聲母受不同介音的影響而表現出來的不同音品，即方氏所說的聲狀。他說:"聲爲韵迮，其狀則異。"說的正是這層意思。聲狀有四，拿見母爲例，其四狀叫做庚見粗京見細肱見粗君見細，可知他的四狀，實際指與開、齊、合、撮四呼韵拼合的聲母。

不過，方氏的聲分粗細，與純粹聲介合母的做法還有區別，因為聲介合母的結果，勢必要增聲減韵，而方氏不過用聲介合母的方法描寫聲母在不同呼第中的不同狀況，這個介母，在分析韵母時又被用來顯示四呼。他的這種方法，在建立音韵系統、方便審辨字音方面有一定的積極作用。"(pp.449～450)

下記に、方中履が「欲加母者。以迮狀不明也。」と批判する増字母説の採用者、呉澄・陳晋翁・趙宦光の字母の字音の性格を、『広韻』に見られる中古音によって観察してみると、次のようである。

呉澄「切韻指掌図節要序」

「見」平声先韻開口見母「古電切」・同匣母「胡甸切」

「圭」平声斉韻合口見母「古攜切」

「溪」平声斉韻開口溪母「苦奚切」

「缺」入声屑韻合口溪母「古穴切」・入声薛韻合口溪母四等「傾雪切」

「芹」平声欣韻群母「巨斤切」

「群」平声文韻群母「渠云切」

「疑」平声之韻疑母「語其切」

「危」平声支韻合口疑母三等「魚爲切」

「非」平声微韻非母「甫微切」

「威」平声微韻合口影母「於非切」

：中古音の見地から見ると、細音の開合の対立が別字母として反映しているということができる。

陳晋翁「切韻指掌図節要」

「經」平声青韻開口見母「古靈切」・去声径韻開口見母「古定切」

「堅」平声先韻開口見母「古賢切」

「扃」平声青韻合口見母「古螢切」

「涓」平声先韻合口見母「古玄切」

「輕」平声清韻開口溪母「去盈切」・去声勁韻開口溪母「墟正切」

「牽」平声先韻開口溪母「苦堅切」・去声霰韻開口溪母「苦甸切」

「傾」平声清韻合口溪母「去營切」

「圈」上声阮韻合口群母「求晩切」・上声獮韻合口群母三等「渠篆切」・去声願韻合口群母「臼万切」,『集韻』平声元韻合口溪母「去爰切」・平声仙韻合口溪母三等「驅圓切」・平声仙韻合口群母三等「逵員切」

「擎」平声庚韻開口群母三等「渠京切」

「虔」平声仙韻開口群母三等「渠焉切」

「瓊」平声清韻合口群母「渠營切」

「拳」平声仙韻合口群母三等「巨員切」

：同上。

趙宧光（凡夫）『説文長箋』巻首「長箋解題」の「正俗通聲譜」解題

「見」平声先韻開口見母「古電切」・同匣母「胡甸切」

「干」平声寒韻見母「古寒切」

「谿」平声斉韻開口溪母「苦奚切」

「開」平声咍韻溪母「苦哀切」

「群」平声文韻群母「渠云切」

「喬」平声宵韻見母三等「舉喬切」・群母三等「巨嬌切」

「疑」平声之韻疑母「語其切」

「危」平声支韻合口疑母三等「魚爲切」

「曉」上声篠韻暁母「馨皛切」

「好」上声晧韻暁母「呼晧切」・去声号韻暁母「呼到切」

「匣」入声狎韻匣母「胡甲切」

「敆」入声合韻見母「古沓切」

「影」上声梗韻開口影母三等「於丙切」

「賏」平声清韻開口影母「於盈切」・去声映韻開口影母三等「於敬切」

「日」入声質韻開口日母「人質切」

「習」入声緝韻邪母「似入切」

「諭」去声遇韻以母「羊戍切」

「運」去声問韻云母「王問切」

「來」平声咍韻来母「落哀切」

「离」平声支韻開口来母「呂支切」・同徹母「丑知切」

：方中履も一部の用字について苦言を呈しているが、影・喩・日母等については区別の趣旨がよくわからない。洪音の音節を欠く群母はべつとして、他の字母については、洪・細の区別が字母に反映させられていると考えられる。

なお、上記の呉澄の説が、三四等合口の見組の字母を増補している事実に対して、趙蔭棠『中原音韻研究』や曹述敬主編『音韻学辞典』には、これを牙・喉音声母から舌面音の声母が派生してゆく現象の反映として解釈しようとする記述が見える（『中原音韻研究』:“這分明是舊日的見母等不足以代表粗音，故別立圭等母。”、『音韻学辞典』：“很可能，当时这一系的声母中已有[tɕ][tɕʻ][ɕ]的萌芽。”）が、このことについては、以前の拙稿「呉澄と音韻学　２題」（『アジアの歴史と文化』第５輯）で紹介したことがある。

それはともかく、上記のようにして、方氏父子は、字母増補説を退け、字母を削減する説のほうにくみするわけである。しかし、字母削減に従う説のうちでも、李登の『書文音義便考私編』のように、平声にだけ清濁両方の字母を保存する行き方は、声調の区別（陰平声と陽平声）を字母の別として反映してしまったものと認められる。だからこのような方法は、平声の中に「切韻声原」の言う「啌・噹」の別を認める（「切韻声原」は「啌・噹・上・去・入」の五声説である）ことで回避できるとされ、退けられるわけである。

引用文献

『方以智全書』第1冊　1988上海古籍出版社

方以智『通雅　下』「和刻本辭書字典集成」第七巻　1981汲古書院

戴震『声韻考』「音韻学叢書」所収

王応麟『玉海』1987江蘇古籍出版社・上海書店（光緒９年浙江書局刊本影印）
呂維祺『音韻日月燈』「続修四庫全書」所収
劉牧『易數鈎隱圖三卷』「通志堂經解」所収（易第１冊）
胡一桂『周易本義附録纂注』「通志堂經解」所収（易第７冊）
胡一桂『周易啓蒙翼伝』「通志堂經解」所収（易第７冊）
『儀禮』「十三経注疏」所収　1990上海古籍出版社
劉鑑『経史正音切韻指南』「等韻五種」所収
呉澄「切韻指掌図節要序」『呉文正集』所収　「四庫叢書珍本叢書」本
趙宧光『説文長箋』京都大学人文科学研究所所蔵本
葉秉敬『韻表』明万暦三十三年序刊　国立公文書館蔵
永島榮一郎「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料について（続）」『言語研究』九号　1941
呉元満『六書總要』（附「諧聲指南」）東京大学東洋文化研究所所蔵本
蘭茂・畢拱辰『韻略易通・韻略匯通』1962・1972　広文書局
張位『問奇集』「百部叢書集成『宝顔堂秘笈』」所収
李登『書文音義便考私編』「続修四庫全書」所収
蕭雲従『韻通』「続修四庫全書」所収
慶谷壽信「『字母』という名称をめぐって」『日本中国学会報　第33集』1981
田久保周誉『批判悉曇學』　1944・1978真言宗豊山派宗務所
金尼閣『西儒耳目資』（国立北平図書館蔵本影印）
李新魁『漢語等韻学』1983中華書局
時建国「《切韻聲原》研究」『音韻論叢』中国音韻学研究会・石家荘師範専科学校編　2004斉魯書社
趙蔭棠『中原音韻研究』1984新文豊出版社
『校正宋本広韻』芸文印書館（沢存堂本・周祖謨校訂）
『宋刻集韻』1989中華書局（北京図書館蔵本）
富平美波「『六書總要』（明・呉元満著）の音注について」『アジアの歴史と文化』第２輯　1995
富平美波「呉澄の音韻学　２題」『アジアの歴史と文化』第５輯　2001
富平美波「方中履『切字釈疑』「等母配位」の条を読む（「切字釈疑」訳注１）」『アジアの歴史と文化』第13輯　2009
富平美波「方中履『切字釈疑』「切韻当主音和」の条を読む（「切字釈疑」訳注２）」『アジアの歴史と文化』第14輯　2010

【本稿は、平成22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））『「切字釈疑」訳注』の研究成果の一部である。】

（山口大学人文学部教授）